

書評

西村慎太郎 著

# 『「大字誌浪江町権現堂」のススメ』

Shintaro Nishimura,

“‘Ooazashi Namie-machi Gongendou’ no susume”

井出 竜郎

Tatsuro Ide



いりの舎/2021年9月/  
四六判/256頁/  
定価 1,500円+税

## 1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災によって、福島県の浜通りは広い範囲で地震・津波・原子力発電所事故が重なる複合災害の影響を直接的に受けた。テレビや新聞の報道を介して、被災地となった浜通りの状況が広く伝えられたことにより、多くの人にとって、浜通りといえば災害以降の街の風景が記憶されているかもしれない。

本書は歴史研究者である西村慎太郎による研究実践の記録である。著者自身が自らさまざまな資料にあたり、各地を訪問し、人びととの交流を通じて地域の歴史を学びながら、被災地において歴史研究が果たすことのできる役割を模索していく。その過程の記録が紙面の上で編み合わされたことにより、本書は地域の歴史を立体的に、多角的に、彩り豊かに伝える貴重な書となっている。

まず、本書のタイトルに示された「大字誌浪江町権現堂」を確認することから本評を始めたい。本書の説明によれば大字とは「市町村内部の地名<sup>おおあざ</sup>」のことであり、大字誌とは「大字の歴史や文化などを表した本」である。そして「浪江町権現堂」とは、福島県浜通りの双葉郡に属する浪江町<sup>なみえまち</sup>の中に位置付けられる大字「権現堂<sup>ごんげんどう</sup>」のことを指している。

著者である西村は、地域の歴史資料を保存・保全し、地域の人びとと共にそれを継承する活動を行なっている。その活動の一つに、西村が代表理事を務める「NPO法人歴史資料継承機構じゃんぴん」があり、このNPO活動を通じて、福島県浜通りの各地域でも震災で被災した歴史資料を救出する活動に取り組んでいる。西村自身は福島県出身ではなく、この地域にゆかりがある訳ではなかったが、この活動を通じて浜通り地域の人びとと交流するようになっていった。

本書のテーマである、浪江町権現堂の大字誌の編纂が始まるきっかけとはどのようなものだったのか。西村は、本書の取り組みが始まる以前から、福島県浜通りの複合災害被災

地域において大字誌の編纂に取り組んできた<sup>1)</sup>。その後、2021年1月11日に福島県二本松市で開催されたライフミュージアムネットワーク2020のオープンディスカッション「浪江町の記憶の残し方・伝え方」に西村が登壇したことが、西村と浪江町権現堂を引き合わせる。そのイベントで浪江町出身の原田雄一、歌人・三原由起子と対談し、その場で「浪江町の中で大字誌を作りたい」と宣言したことから話が動き出す。西村は、イベントに参加するまで浪江町の海岸沿いの地域は訪れたことがあるものの、権現堂を含む浪江町のその他の地域については全く知識がなかったと本書の中で率直に語っている。

浪江町の地域や歴史を学ぶことを目的として、西村がブログ「『大字誌 浪江町権現堂』(仮) 編さん室」<sup>2)</sup>を始めたのは、2021年3月12日午前5時44分である。この日時は「東京電力福島第一原子力発電所事故によって、日本政府が10km圏内の避難指示を発出し、浪江町大字権現堂のりびとが避難を余儀なくされたその瞬間からちょうど10年目」(156頁)であった。その日から、調査を終えて更新を休止する2022年3月31日まで、西村は毎日欠かさず投稿を続けてきた。

## 2. 本書の構成

本書は、西村が始めたブログ投稿のうち70日分(2021年3～5月)をまとめた「調査日誌」と、歌人・三原由起子との対談「大字誌から立ち上がるもの」で構成されている。本書の「はじめに」では、ブログの投稿が研究の成果というよりも勉強日誌や学習日誌のような位置づけであると述べられている。しかし、西村が浪江町権現堂の資料を集めながら一つ一つ学んでいく過程を日誌というかたちで書き記したことにより、本書はひとりの歴史研究者による調査研究の活動記録という性格を持つに至っている。

ブログというメディアの特徴から、ときにはネットスラングや絵文字も織り交ぜた口語体の文体は軽妙で読みやすい。一方で、学術論文のように研究の成果として体系立てて整理されているわけではないため、古代史から近代史へ、公文書から釣具店のチラシへ、日々の投稿はさまざまな年代と主題を行き来しており、その往来に読者はしばしば振り回される。だが、本書のページをめくるに従い、読者は研究者である西村が学びながら知識を深めていく過程を辿っていくような体験を得られる。本書の目次にはテーマ別索引も用意されているが、まずは西村の学びに並走するように、ページ順に時系列で読んでいくことをおすすめしたい。

調査日誌のページ右側には、本書の発行時点での後日談として、ブログの内容を振り返るコメントを西村自身が追記している。後に調べて分かった事実や、その時点の認識の誤りについてコメントが入ることで、読者はブログとは別の知識の広がりを得ることができる。ブログ投稿時の内容には追記や修正がほとんどなく、必要な場合のみ、補足や訂正の

1——西村慎太郎、「複合災害地における歴史的实践：福島県浜通りの大字誌」『BIOCITY』、85号、ブックエンド、2021年、14～20頁。

2——現在は「『大字誌 浪江町権現堂』執筆日誌」と改題の上、投稿が継続されている。

コメントが添えられている。ここではあえて示さないものの、西村はある大きなミスをしてしまっているのだが、それもコメントであっけらかんと露呈させている。このようなコメントも、本書の魅力の一つになっていると言えるだろう。

資料調査の経緯と共に、地域の人びととの交流を通じて研究成果が蓄積されていく過程を見ることができるのも、本書の魅力の一つである。ブログの投稿は、まず浪江町権現堂がどこにあるのか、地図を見ながら位置を確かめ、地名辞典で権現堂の大字の由来を調べることから始まる。ここで、多くの読者と西村は出発点を共有することになる。そこから、『浪江町史』や『相馬藩史』といった自治体史や、浪江町出身で昭和の作曲家である佐々木俊一の歌碑を調べ、文化財レスキューで発見した茶碗の裏の文字を読むなど、さまざまな資料にまつわる調査の成果を日々の投稿へと結びつけていく。さらに、ブログではSNSなどを介して浪江町の住民や他の研究者から情報が寄せられていることにもたびたび言及されているが、その情報をもとに、西村は聞き取り調査を行ったり、資料の新たな事実を発見したりしている。このような人びとから聞いた活きた情報が、文献や資料と共に丁寧に編み込まれたことによって、紙面の上に浪江町権現堂の歴史と文化が鮮やかに立ち上がっていく。人びととの交流という点において、本書に浪江町出身の三原との対談が掲載されていることは、著者が発する大切なメッセージの一つだろう。

本書の調査日誌は時系列の記録であり、体系的かつ分かりやすい章立てがなされている訳ではない。紙幅の都合上、本評で70日分の調査日誌の内容を全て紹介することができないため、次節で大きく4つに焦点を絞り、巻末の三原との対談も加えて、評者の所感も交えながら紹介したい。

## 調査日誌の内容① さまざまな文献の調査

前節で触れた『浪江町史』や『相馬藩史』と共に、頻繁に参照される文献の一つが相馬市指定文化財にも指定されている『奥相志』である。『奥相志』は安政4（1857）年に編纂が開始された相馬藩領の地誌であり、その内容は自治体史『相馬市史 4 資料編1』（相馬市、1969年）にも収載されている。

まず、「調査日誌（勉強中）24日目 江戸時代の権現堂の人口」（69～70頁、以下本文の引用時は副題と頁数のみ示す）では、『相馬市史 4 資料編1』にある権現堂村の人口にまつわる記述を読み解いていく。同書には、江戸時代後期以降、天明3（1783）年から文久元（1863）年にかけて、家数が85→74→88軒、人口が338→344→565名で推移していることが記録されている。その推移には天明の飢饉による影響などがうかがえることから、自治体史とは当時の人々の暮らしを思い起こさせる貴重な資料とも言えるだろう。

また、「まぼろしの長安寺」（71～73頁）では、文久元年には権現堂村に寺が2軒あったという記録があるが、現在は1軒しか残されていないことについて、再び『相馬市史 4 資料編1』を開いて確かめている。同書の記録によれば、もう1軒の寺院は長安寺という名称であり、このまぼろしの長安寺をめぐる西村の考察もたいへん興味深い。

『わが郷土なみえ』（45～48頁）では、福島県を中心に店舗を展開するスーパーマーケッ

トチェーンであるヨークベニマルが、出店した地域の郷土史をまとめて刊行していることが紹介されている。内容が読みやすいだけでなく、自治体によって編纂された『浪江町史』を補完する内容であるため、このヨークベニマルによる郷土史『わが郷土なみえ』はブログでもたびたび参照されている。地域の生活とスーパーマーケットの関係は現代社会において切り離せないものであり、その意味でも同書は、生活者の視点から地域の歴史をまとめたユニークな資料だと言えるだろう。

## 調査日誌の内容② 古文書の所在調査と大火の歴史

「福島県立図書館で収蔵している権現堂関係の資料を確認しよう」(220～225頁)では、研究の基礎となる古文書の所在調査について取り上げている。地域史を研究する上では、地名辞典や『浪江町史』のような自治体史を確認する作業のほかにも、古文書などの一次資料に触れることも重要であるという。最近では歴史研究においても「一次資料」「二次資料」という作成主体による分け方はされないそうだが、本書では「原資料」という意味合いを込めて、敢えて「一次資料」と表現していることがコメントで付言されている。こういった古文書などの資料は、元の所有者の手を離れ、博物館や図書館などに寄贈・寄託され保存・管理されている可能性があり、地域史の研究ではそのような状況を確認した上で、実際にそれらの資料を閲覧することが求められているとある。

浪江町については、当地の図書館が災害の影響で閉まっていたため、西村は福島県立図書館のデータベースで「浪江」「権現堂」といったキーワードを検索し、6点の資料を確認している。そのようにして確認した資料のうち、『双葉郡浪江町大火原因及焼失戸数并罹災者姓名調』<sup>3)</sup>には、浪江町がたびたび大火に見舞われてきたことが示されていた。西村は「安政の浪江大火と街路の変更」(76～79頁)の中で、安政6(1859)年2月9日未明に発生した安政の浪江大火の記述を取り上げているが、『相馬市史 4 資料編1』に掲載されている『輿相志』の記述によれば、この大火によって、火災対策のために街路を変更することになるほど街が焼き尽くされてしまったそうである。

さらに「近代権現堂の大火」(122～123頁)では、西村は自治体史『浪江町近代百年史』所収の一篇「浪江消防史」<sup>4)</sup>を参照し、浪江町における前近代資料の少なさは、幕末から近代にかけて同町が数十年おきに大火に見舞われたことによるものではないかと述べている。

このような災害の記録について読むことは、被害があった事実を後世に示し、同時に災害に対する記録の脆さを浮かび上がらせるものであることに評者は気付かされた。この気付きは、現在進行形で続く複合災害の災厄とも結びつき、改めて記録を残すことの難しさ、それを伝え続けることの大切さを痛感させられた。

3——浪江町編、資料『双葉郡浪江町大火原因 及 焼失戸数 并 罹災者姓名調(写)』浪江町、1902年(福島県立図書館蔵、請求記号:L/317.7/N4/1)。

4——「浪江消防史」『浪江町近代百年史 第1集』、浪江町郷土史研究会、1984年。

### 調査日誌の内容③ 人びとの「移動」

西村自身の関心もあり、調査日誌には鉄道やバスといった「移動」に関わる内容もよく見られる。例えば、鉄道関係では「浪江駅とホームのレール」(52～55頁)において、浪江駅の歴史や国鉄時代のレールを再利用した駅舎の話に始まり、大正時代の鉄道敷設計画についても触れている。

一方、大字権現堂という大字の小さな生活圏に暮らす人びとにとって、移動手段としてより身近なのは鉄道よりも公共バスであるかもしれない。ここではバスに関する投稿を2件紹介したい。西村は、「福浪線時刻表をゲットしました」(79～83頁)で古書店にて購入した昭和25(1950)年の福島市内「汽車・電鉄バス改正時刻表」について取り上げ、「浪江新町バス停と町営バス」(175～179頁)では、東邦銀行浪江支店前に遺された浪江新町バス停を原子力災害直前の貴重な文化財として写真で記録している。この点について西村は、バスに関する研究は少なく、路線の廃止・変更、バス停の廃止が頻繁にあり、時刻表自体がとても大切な歴史資料であるとコメントで述べている。

前者の時刻表には、鉄道先行路線として設置された福島と浪江を結ぶ国鉄バス「福浪線」の路線時刻が記されており、1950年代には1日3往復の運行で3～4時間ほどかかっていたことが分かる。

その後、2004年には福浪線のうち川俣町内のバス停から浪江間が廃止され、川俣町と浪江町による代替の町営バスが運行されるようになる。後者で触れられているバス停は、この町営バスのために設置されたものであり、バス停に貼られた時刻表は劣化していたが、西村はかろうじて確認できる文字を読み解いて時刻表を書き写している。

このバスの時刻表にまつわる2件の投稿は、評者に強い印象を残した。「移動」という観点は、震災と原発事故の複合災害によって故郷から避難することを余儀なくされた人びとの思いとも重なる。過去の時刻表を集めたり、バス停の消えかけた時刻表を書き写したりすることは、「移動」が制限される災厄への抵抗として力になるだろう。

### 調査日誌の内容④ 浪江座

評者が特に興味を引かれたのは「浪江座」(119～121頁)だ。本文中の説明によると、浪江座は浪江の近代化にも大きく貢献したと考えられる郡豊太郎が中心となり明治41(1908)年に建設された。常設の劇場ができることは近代化の象徴であり、今よりも娯楽の少なかった時代においては、地域の文化を豊かにさせたであろうことが想像できる。この浪江座では、大正末期から昭和初期にかけて映画(活動写真)の上映が開始され、戦後に至るまで、映画や舞台などで浪江町の多くの観客を楽しませてきた。しかし、資料があまり残っていないため、活動や閉鎖時期についてはまだ分かっていないことも多く、本書発行以降に投稿された記事にも、聞き取り調査などを継続しているとある。

評者は、2013年にドキュメンタリー映画『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』<sup>5)</sup>を鑑賞し

5——藤井光監督、『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』、74分、2013年、製作：ASAHIZA 製作委員会、朝日座を楽しむ会。

たことがある。この映画の主題は、同じく福島県浜通り南相馬に大正12（1923）年に開館した木造劇場の「朝日座」である。映画には、地域住民に対してインタビューを行い、朝日座についての記憶を語ってもらう様子が記録されている。そこから浮かび上がるのは、劇場が地域コミュニティの拠点として重要な役割を担ってきた歴史であり、その歴史が住民たちの語りを通じて静かに描かれている。

この映画を鑑賞したときの印象とも重なり、浪江座に関する資料は、福島県浜通りにおける劇場文化の側面を豊かに伝える記録になりうるのではないかと感じられた。建物が現存する朝日座と異なり、すでに閉鎖されてしまった浪江座の資料は少ないだろうが、今後の大字誌の編纂を通じて、浪江座のすがたが明らかにされていくことを期待したい。

### 対談「大字誌から立ち上がるもの」

本書の後半に収載されているのは、大字誌の編纂のために浪江町権現堂を調査する西村と、権現堂出身で歌人の三原由起子の対談である。西村は、大字誌のテーマとして「身近な歴史を解くことの意味がどこにあるのか」ということを常に問い続けていると語る。これを受けて、三原は「自分の生まれ育った権現堂の歴史的なことを知りたくても、調べ方が分からない」し、「そんな大した歴史のある場所じゃないよというのをずっと思っていました」と率直に述べつつも、西村の調査によって、教科書で学ぶ歴史ではなく、身近な権現堂の歴史の大切さを痛感するようになっていき、自分の土地に誇りをもつためにも大字誌が大事だと思うようになったと期待を込めて話している（244頁）。そして、大字誌に抱くイメージを問われた西村は、「…実際には大字の歴史というのがダイレクトに日本の歴史とはつながらない。でも本当は、ルートとしては逆で、大字から立ち上げる歴史というのが大事なんですよね」と応答している（245頁）。

研究者である西村と権現堂出身の三原の対談を読み、両者のまなざしは、過去の記録から読み解ける事実を知ることだけではなく、地域の人びとの営みにも向けられているように感じられた。記録の背景にある人びとの営みに視点を向けることで、西村が指摘するように、大字から地域の歴史を立ち上げていくことが実現できるかもしれない。

また、この対談では、10年という時間が経って、ようやく震災の経験を話せるようになってきたという被災者の言葉が取り上げられている。震災の記憶を受け入れることは容易なことではないが、いずれ時間が経ったときに、大字誌を通じてその記憶に向き合うことが可能になるかもしれない。このように、本対談は、災厄によって歴史が分断されてしまった被災地において、大字誌が持つ可能性を感じさせる内容となっている。

## 3. 所感

本書は、西村が浪江町に足を運び、資料を手にとり、内容を書き記し、人びとの言葉に耳を傾けながら、日々の考えをブログに書き留め、それを書籍としてまとめ上げたものだ。西村の言葉の繰り返しになるが、本書の調査日誌は、研究の成果というよりも勉強日誌や

学習日誌として位置付けられている。そのため、浪江町権現堂の体系的な歴史がまとめられるのは、大字誌の編纂を待たなければならない。しかし、近道のない地道な学びの積み重ねをそのまま提示した本書の内容は、西村の研究者としてのありのままの姿であり、そのような活きた学びに触れることができる読書体験は他に類を見ない。その過程で示された地域に向き合う姿勢や研究手法は、歴史研究者やアーキビストのような記録を扱う立場の専門家が共有していくべきことのひとつであろう。それゆえ、本書は歴史研究や資料整理の実践的な指南書として読むことができる。

先述の対談で、三原は「暮らしの記憶を原発事故で消されたくないな、っていう気持ちがあるんですよ」と語っている（247頁）。私たちは、被災地に関わりを持つ当事者たちの切実な思いに耳を傾け、応答するために何ができるのか。浪江町や浜通りの原風景を知らない評者のような非当事者にとって、その応答とは、その地域の歴史を知ることから始められるのだと、本書で示された西村の姿勢を受け止めて考えさせられた。

本書を読み進めることで、報道を介して伝えられる被災地としてではなく、生きた歴史が綿々と受け継がれてきた大字という浪江町権現堂の一面を知ることができる。西村のような歴史研究者の実践を通じて、さまざまな人々が地域の歴史を知ることが、災厄によって地域の歴史を失わせないための抵抗の手段にもなりうる。そして、私たちが被災地に寄り添うために踏み出す最初の一歩を、本書は導いてくれるだろう。